日本・韓国における月経に伴う愁訴の比較と初経年齢の推移

安　部　保　子

はじめに

本年8月に福岡で開催されたユニバーシアード大会において、数多くの女性選手の活躍が感動をよんだ記憶はまだ新しく、その後も我が国において、ワールドカップなどの競技が開催され、多くの日本女性選手も参加の機会を得、活躍するとともにすばらしい結果を得ている。

現在では、競技スポーツにも女性の活躍の場が開做され、女性スポーツに対する関心と理解が高まっているが、1964年に開催された東京オリンピック以前においては考えられなかったことである。

日本人特有の伝統的な意識の中に、女性は「女らしく」との考え方が強く、激しい闘争的な競技スポーツへの参加に対して否定的な考え方が、父母や指導者等にあるため、競技スポーツへの参加者が少ないことが考えられる。

また、女性は、生理的にも男性とは違い特殊なものであると考えられ、スポーツをすることは初経・月経、妊娠および出産などに障害になるといわれ、「母性保護」のもとに女性には過激なスポーツを禁じる傾向にもあった。しかし現在では、月経、妊娠および出産などにおいても適度なスポーツ活動はかえってそれらに対する苦痛を軽減することが示唆されている。

本研究は、女性特有の生理現象の一つである月経に注目し研究を続けているが、本報告においては、特に多くの者が経験する月経に伴う症状（愁訴・月経困難症）について考える。

月経困難症（dysmenorrhee）とは、疼痛を伴った月経、つまり月経に伴って起る不快な症状を総称しており病気というよりは症候群として考えられている。月経血流出に伴う疼痛は、性成熟の初期からみられる場合とかなり年

齢が進んでからみられる場合がある。[1]

症状としては、弱い痛み・激しい痛み、下腹部痛や腰痛など部分的な痛みまた嘔吐、倦怠など全身症状を伴うこともあり、痛みの激しさは個人によりかなり違いがあるが、生殖機能に異常を起すことは多くはない。

女性の30～50％は、月経困難症を経験しているといわれている。

永年、病態生理学としての本能性月経困難症はほとんど理解されておらず、月経困難症に対して、精神的なもの、神経質な女性特有なもの、女性の宿命であると言われてきた。

月経困難症の原因については、最近の研究結果によれば、子宮内膜のプロスタグランデイン（P.G.）が痛みを伴う子宮収縮など、月経困難症の全身性の症状を引き起すとされたいる。

月経困難症は、原因によって原発性と続発性に分けられているが、原因がはっきりしない機能的なものといえる原発性のものは、子宮内膜でのP.G.の産生過剰やその作用の過剰反応によって起ると考えられている。続発性のものは、子宮筋腫や炎症および子宮内膜症などの器質的な疾患がある場合である。

月経困難症の原因となるものは先記した他に、

1．閉塞状態にある子宮頚部が開くことによって血液が凝固し、子宮がうっ血するため。
2．月経の排泄物を通すために子宮頚部の穴を開くときに痛を生じさせるという説。
3．ホルモンの不均衡によっておこる。
4．心因性および栄養等によるもの。
5．骨盤の神経や靭帯が短くなるため、

などがある。

月経困難症を緩和するための効果的な対処の方法としては、治療薬（経口避妊薬・ホルモン剤など）の使用もあるが市販薬を使用することによって有害な副作用の発現を心配するならば一時的な鎮静を考えるより潜在的なリスクに重点を置いて考えることも一つの方法である。

本研究は、このことに基づき月経困難症（特に原発性のものを対象としている）が、身体活動におよぼす影響についての先行研究として、本報告は日本・韓国において月経の随伴症状および随伴症状の出現の時期について、比

較検討することを第1の目的とし、第2目的は、日本・韓国における初経年齢について検討する。

思春期女性の身体発育状況の一つの指標である初経についていろいろな角度から数多くの研究が行われている。

思春期における身体の発育は著しく、個人差も大きく、特に女性においては初経を境として性ホルモンの影響が大きくあらわれる。初経の発来は、性ホルモンの活動開始の時点ではなく、性腺刺激ホルモンの働きにより、性ホルモンが分泌され卵巣や子宮がかなり成熟しておこることは周知の通りである。初経発来の時期は、急速な身長の伸びが終ってから半年ないし1年後が定説である。平均初経年齢は近年世界的に若年化を続けてきたが、日本においては1970年頃より今日までに12歳台を維持している。

Tanner（1970[2]・1978[3]）や守山（1980[4]）らは、1900年代の平均初経年齢は16歳台であり、1960年代には13歳台まで若年化したことを報告している。

本研究の初経に関する日本・韓国の共同調査研究においては、日本大学生の平均初経年齢は1985年の調査から現在（1993）まで12歳台を維持し、韓国大学生の平均初経年齢は1985年において日本大学生より36ヶ月遅い15歳6ヶ月、1986年においては14歳5ヶ月、1990年においては13歳2ヶ月という結果を得ている。これは、Tannerらが平均初経年齢の若年化は、10年間に3～4ヶ月であると報告した結果と比較すると、本研究の結果は若年化の傾向がさらに著しく驚異的であることをすでに報告している。

本報告においては、その後の初経年齢の動行を明らかにし、さらに日本と韓国における初経年齢の推移について比較検討する。

方　法

1．調査対象者

調査対象者は、日本においては下関市内、韓国においてはソウル市内に在住の中学生（13歳）・高校生（16歳）および大学生（19歳）である。

2．調査対象者数

1987年　日本――中学生（J・J）123名、高校生（J・H）120名、大学生（J・C）130名　計373名。韓国――中学生（K・J）121名、高校生（K・H）100名、大学生（K・C）100名　計321名、合計694名。

1993年　日本―中学生（J・J）112名、高校生（J・H）140名、大学生（J・

C）146名　計298名。韓国―中学生（K・J）107名、高校生（K・H）97名、大学生（K・C）119名　計323名、合計721名、総計1415名。

3．調査方法

日本・韓国とも1987年、1993年の11月に質問紙を各地区中学生・高校生および大学生に配布し回収、集計し、検定をおこなった。

4．調査内容

身長・体重・初経年齢・月経周期および随伴症状である。

結果および考察

1．月経随伴症状について

月経随伴症状についての結果は、Table 1、Table 2 に示す通りである。

月経随伴症状を有する者は、日本においてはJ・J群 64.0%、J・H群 81.4%、J・C群 93.3%、韓国においてはK・J群 87.7%、K・H群 93.8%、K・C群 93.3%である。

日本・韓国ともその症状が、加齢に伴い増加の傾向を示している。

中学生

随伴症状の出現の時期と上位 3 位までの結果はTable 3、Table 4 の通りである。

Table 3
随伴症状　J.J－group

	月経 前	月経 中	月経 後
1	下腹部痛 (39.6%)	下腹部痛 (47.9%)	下腹部痛 (6.3%)
2	全身のだるさ (25.0%)	全身のだるさ (31.3%)	全身のだるさ (6.3%)
3	おりもの (18.8%)	腰　痛 (22.9%)	いらいらする (6.9%)

Table 4
随伴症状　K.J－group

	月経 前	月経 中	月経 後
1	おりもの (44.0%)	怒りっぽい (44.0%)	おりもの (26.0%)
2	下腹部痛 (20.0%)	下腹部痛 (44.0%)	眠気がする (12.0%)
3	腰　痛 (16.0%)	眠気がする (28.0%)	腰　痛 (8.0%)

月経中は、日本・韓国とも「下腹部痛」が最も多く、P・Gの作用によるも

のと考えられる。

J•J群においては、月経前・月経中および月経後に「下腹部痛」が最も多く。1％以下の危険率で有意差が認められた。ついで月経前は、「全身のだるさ」•「おりもの」、月経中は、「全身のだるさ」•「腰痛」、月経後は、症状も少なく比較的多くの者が快適に過ごしていると考えられる。

K•J群においては、月経前は「おりもの」が最も多く、ついで「下腹部痛」•「腰痛」の順である。月経中は、「下腹部痛」とならんで「怒りっぽくなる」が多く、ついで「眠気」があげられている。月経後は、「おりもの」が最も多い傾向にあるがJ•J群に比べて多種の症状をあげており「いらいらする」•「怒りっぽくなる」等心理的症状が現われていることは注目すべきである。特に精神の不安定な時期であるので指導者含む周囲の者は、注意深い指導と助言が必要であると考えられる。

高校生

随伴症状の出現の時期と上位3位までの結果はTable 5、Table 6の通りである。

Table 5
随伴症状　J.H－group

	月経 前	月経 中	月経 後
1	下腹部痛 (60.5%)	下腹部痛 (30.7%)	おりもの (7.0%)
2	腰　痛 (30.7%)	腰　痛 (29.8%)	腰　痛 (4.4%)
3	腰がだるい (21.1%)	腰がだるい (29.8%)	腰がだるい (4.4%)

Table 6
随伴症状　K.H－group

	月経 前	月経 中	月経 後
1	おりもの (50.5%)	下腹部痛 (45.1%)	おりもの (14.3%)
2	下腹部痛 (30.8%)	腰　痛 (41.8%)	腰　痛 (9.0%)
3	腰　痛 (28.6%)	怒りっぽい (30.8%)	貧　血 (5.5%)

J•H群においては、月経前（60.5%）、月経中（30.7%）ともに「下腹部痛」が最も多い症状である。上位3位までに、P•Gの作用であると思われる身体的な愁訴「腰痛」•「腰がだるい」が入っている。月経後の症状は、「おりもの」（7.0%）•「腰がだるい」（4.4%）の順であるが出現率も低く、月経の後は快適に過ごしていることがうかがえる。

K•H群においては、月経前・月経後に「おりもの」(50.5%・14.3%)、月経中は、「下腹部痛」(45.1%) が最も多く、ついで「腰痛」(41.8%) である。

J•H群・K•H群とも身体的愁訴が多くP•Gの作用を受けていると思われるが、K•H群に高い割合 (30.8%) で精神的愁訴 (「怒りっぽくなる」) が台頭してきた。このことは、女性独特の月経時の問題行動とも関連があると考えられるので今後追求していきたい。

大学生

随伴症状の出現の時期と上位3位までの結果はTable 7、Table 8の次の通りである。

Table 7
随伴症状　J.C−group

	月経 前	月経 中	月経 後
1	下腹部痛 (35.3%)	下腹部痛 (55.9%)	おりもの (8.8%)
2	おりもの (30.9%)	腰　痛 (52.9%)	腰　痛 (2.9%)
3	いらいらする (25.7%)	腰がだるい (41.9%)	下腹部痛 (2.9%)

Table 8
随伴症状　K.C−group

	月経 前	月経 中	月経 後
1	下腹部痛 (41.4%)	下腹部痛 (42.3%)	おりもの (8.8%)
2	おりもの (36.0%)	腰　痛 (41.1%)	全身のだるさ (4.5%)
3	腰　痛 (35.1%)	下腹部のだるさ (26.1%)	腰　痛 (3.6%)

J•C群、K•C群ともに身体的愁訴が上位を占め、月経前は「下腹部痛」(35.3%)「おりもの」(30.9%)、月経中は「下腹部痛」(55.9%)、「腰痛」(52.9%) があげられている。

J•C群において、月経前に精神的愁訴である「いらいらする」(25.7%) が3位に台頭した。このことは、月経前は精神的に不安定状態にあることが推測される。

まとめ

1．随伴症状の出現は、両国各群とも月経中が最も多く、その出現率は加齢に伴い増加傾向にある。

2．月経前は、韓国の各群は「おりもの」、日本の各群は「下腹部痛」、月経中は、日本・韓国各群とも「下腹部痛」、月経後は日本・韓国各群とも「おりもの」が最も多い随伴症状である（P＜.01)。

2．初経年齢について

初経年齢に関する結果は、Table 9、Table 10 の通りである。

Table 9
The comparison of japanese groups with Korean groups (1987)

	Junior		High school		College	
	Japan	Korea	Japan	Korea	Japan	Korea
N	123	121	120	100	130	100
Average age	13.9	13.8	16.6	16.7	19.1	19.9
No menarche	8.2	6.1	0	0	0	0
Average age at menarche	12.6	13.2	13.3	13.1	12.9	13.2
Height	153.9	156.4	156.8	158.5	157.1	160.1
Weight	45.0	44.7	49.4	50.2	51.5	51.2

Table 10
The comparison of japanese groups with Korean groups (1993)

	Junior		High school		College	
	Japan	Korea	Japan	Korea	Japan	Korea
N	112	107	140	97	146	119
Average age	13.7	13.6	16.6	16.6	19.7	19.0
No menarche	33.0	46.7	0	0	0	0
Average age at menarche	12.1	11.8	12.5	12.9	12.1	13.1
Height	150.0	153.0	156.7	161.1	158.4	160.7
Weight	45.0	43.4	50.3	52.1	51.8	52.8

大学生の平均初経年齢の結果は、1987年Fig. 1、1993年Fig. 2 の通りである。

大学生の平均初経年齢を、1987年（J•C群—12歳 9 ヶ月、K•C群—13歳 2

Fig. 1 The comparison of age at menarche (1987)

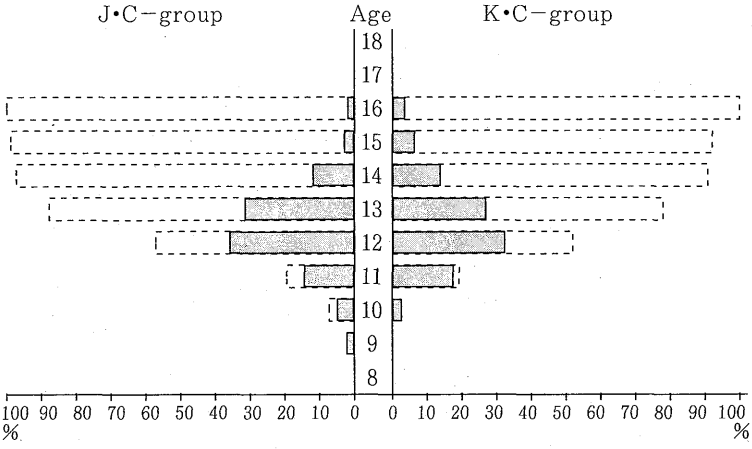
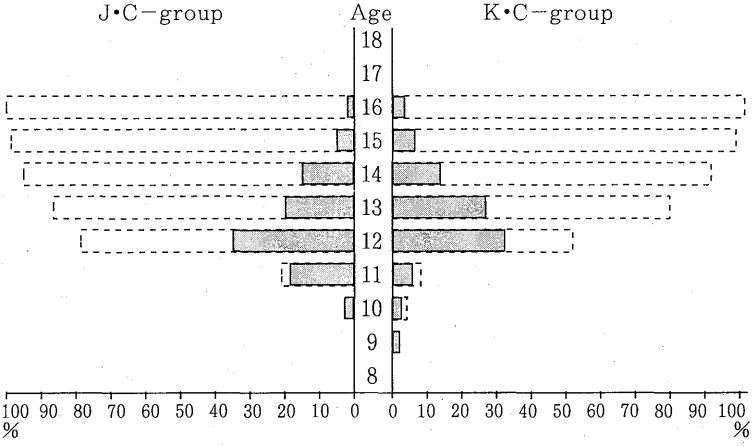


Fig. 2 The comparison of age at menarche (1993)



ヶ月）と1993年（J•C群—12歳１ヶ月、K•C群—13歳１ヶ月）を比較検討した結果は、６ヶ年間でJ•C群８ヶ月・K•C群１ヶ月とJ•C群・K•C群とも若年化していることが明らかである。

初経発来の分布は、J•C群・K•C群とも９歳から16歳でそのピークは両群

とも12歳台である。韓国においては、初経発来ピーク後の初来者が多いことは平均初経年齢が高くなる要因であるが、ピーク後の初来者の増加は、栄養・運動・経済および文化水準の上昇などの生活環境も影響していると考えられる。

身長は、K•C群（1987年—160.1cm、1993年—160.7cm）がJ•C群（1987年—157.1cm、1993年—158.4cm）より1987年においては＋3cm、1993年においては2.3cm高い、体重は、1987年においては1.2kg、1993年においては1kgと大きく、発育の良いことが明らかである。このことは、平均初経年齢の遅いK•Cは、Tannerらが身長発育のピークは13歳であると示唆したことから考えるとかなり発育がよく、身長発育のピークは11歳〜12歳台であると推測される。

高校生の平均初経年齢の結果は、1987年Fig. 3、1993年Fig 4の通りである。

J•H群の平均初経年齢は、1987年においては13歳3ヶ月、1993年においては12歳5ヶ月であり6ヶ年間で10ヶ月の若年化傾向にあるのに対し、身長は±0.1cm、体重は±0.9kgの範囲に納まり大きな変動は認められない。

K•H群の平均初経年齢は、1987年においては13歳1ヶ月、1993年においては12歳9ヶ月となり6ヶ年間に4ヶ月早くなり、顕著に若年化していることが明らかである（P＜.01)。身長は2.6cm、体重は0.9kg増加し体位向上の傾向がある。

初経発来の分布は、1987年においてはJ・H群は9歳から14歳・K•H群は9歳から15歳、1993年においてはJ•H群は10歳から15歳・K•H群は11歳から15歳でJ•H群およびK•H群とも初経発来分布は短縮傾向にある。

初経の早発傾向は、成熟の前徴ともいわれ、その原因は体位向上のみが重要な因子といわれてきたが、K•H群における1987年の結果は、1988年のソウルオリンピック等の影響もあり、心身ともに高揚したことや経済が安定し、食糧事情が改善され体位が向上した結果、初経の早発傾向および初経発来分布の短縮が顕著に現われたと考えられる。

中学生の平均初経年齢の結果は、1987年Fig. 5、1993年Fig. 6の通りである。

J•J群の平均初経年齢は、1987年においては12歳6ヶ月、1993年においては12歳1ヶ月で6ヶ年間で5ヶ月の若年化を示しているが、1993年は未初経

Fig. 3 The comparison of age at menarche (1987)

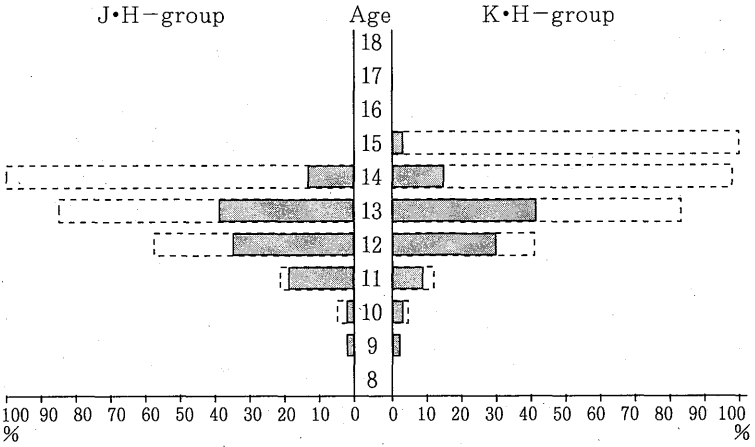
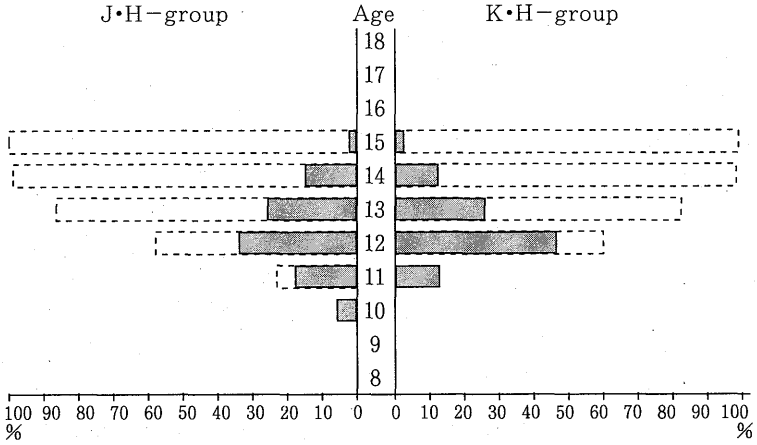


Fig. 4 The comparison of age at menarche (1993)



者が33%と多く、加齢とともに初経が発来し、平均初経年齢も上昇することは必至である。

体重は、45.0kgと変動はないが、身長は1987年においては153.9cm、1993年においては150.0cmと6ヶ年間で3.9cm低下し太めの体型となった。

Fig. 5 The comparison of age at menarche (1987)

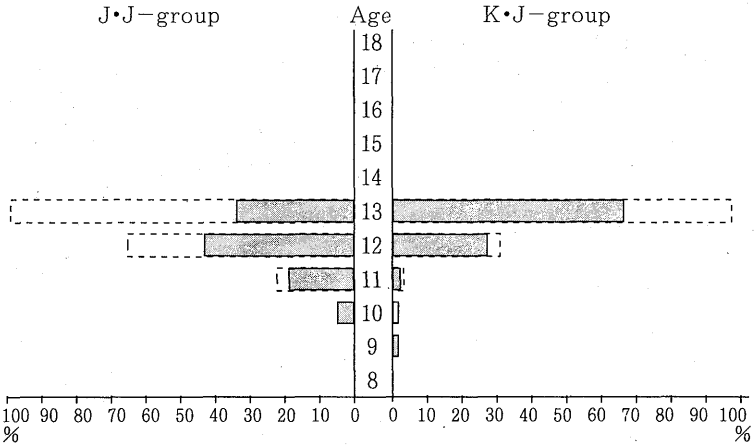
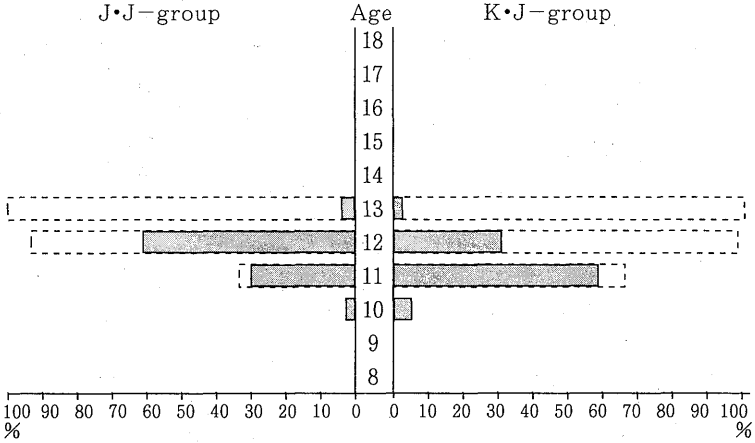


Fig. 6 The comparison of age at menarche (1993)



K•J群の平均初経年齢は、1987年においては12歳２ヶ月、1993年においては11歳８ヶ月と６ヶ年間に７ヶ月の若年化傾向を示したが、このことは未初経者の増加にあると思われるのでいちがいに若年化したとは言えない。また身長は、2.5cm・体重は2.1kg減少し、体位の低下が未初経者の増加にも関与

Tabie 1
随伴症状（日本）

対象者 / 項目	中学生〔112〕			高校生〔140〕			大学生〔146〕			全体〔398〕		
	月経前	月経中	月経後	月経前	月経中	月経後	月経前	月経中	月経後	月経前	月経中	月経後
1 頭　痛	8(16.7)	8(16.7)	1(2.1)	6(5.3)	3(2.6)	(　)	16(11.8)	14(10.3)	(　)	30(10.1)	25(8.4)	1(0.3)
2 乳房の張り	5(10.4)	(　)	(　)	16(14.0)	3(2.6)	(　)	29(21.3)	8(5.9)	(　)	50(16.8)	11(3.7)	(　)
3 胃　痛	3(6.3)	2(4.2)	1(2.1)	3(2.6)	6(5.3)	1(0.9)	3(2.2)	5(3.7)	(　)	9(3.0)	25(5.0)	2(0.7)
4 胸のむかつき	4(8.3)	(　)	(　)	3(2.6)	(12.3)	(　)	1(0.7)	11(8.1)	(　)	8(2.7)	25(8.4)	(　)
5 腰　痛	7(14.6)	11(22.9)	(　)	35(30.7)	34(29.8)	5(4.4)	32(23.5)	72(52.9)	4(2.9)	74(24.8)	117(39.3)	9(3.0)
6 腰のだるさ	5(10.4)	5(10.4)	(　)	24(21.1)	34(29.8)	5(4.4)	28(20.6)	57(41.9)	3(2.2)	57(19.1)	96(32.2)	8(2.7)
7 下腹部痛	19(39.6)	23(47.9)	3(6.3)	69(60.5)	35(30.7)	4(3.5)	48(35.5)	76(55.9)	4(2.9)	136(45.6)	134(45.0)	11(3.7)
8 下腹部の重さ	4(8.3)	6(12.5)	(　)	21(18.4)	12(10.2)	3(2.6)	22(16.2)	56(41.2)	(　)	45(15.1)	74(24.8)	3(1.0)
9 おりもの	9(18.8)	3(6.3)	(　)	10(8.8)	2(1.6)	8(7.0)	42(30.9)	(　)	12(8.8)	61(20.5)	25(1.7)	20(6.7)
10 排尿多い	(　)	1(2.1)	(　)	2(1.6)	1(0.9)	1(0.9)	2(1.5)	7(5.1)	(　)	4(1.3)	29(3.0)	1(0.3)
11 便　秘	(　)	4(8.3)	(　)	6(5.3)	6(5.3)	2(1.6)	13(9.6)	6(4.4)	1(0.7)	19(6.4)	16(6.4)	3(1.0)
12 下　痢	(　)	(　)	(　)	6(5.3)	7(6.1)	(　)	12(8.8)	30(22.1)	3(2.2)	18(6.0)	37(12.4)	3(1.0)
13 貧　血	1(2.1)	1(2.1)	1(2.1)	5(4.4)	7(6.1)	1(0.9)	2(1.5)	10(7.4)	3(2.2)	8(2.7)	18(6.0)	5(1.7)
14 全身のだるさ	12(25.0)	15(31.3)	3(6.3)	19(16.7)	24(21.1)	5(4.4)	16(11.8)	34(25.0)	2(1.5)	47(15.8)	73(24.5)	10(3.4)
15 眠　気	(　)	7(14.6)	(　)	9(7.9)	7(6.1)	2(1.6)	19(14.0)	25(18.4)	4(2.9)	28(9.4)	39(13.1)	6(2.0)
16 興　奮	(　)	1(2.1)	(　)	(　)	1(0.9)	(　)	2(1.5)	(　)	(　)	2(0.7)	2(0.7)	(　)
17 いらいらする	3(6.3)	9(18.8)	3(6.3)	17(14.9)	10(8.8)	2(1.6)	35(25.3)	26(19.1)	(　)	55(18.5)	45(15.1)	5(1.7)
18 怒りっぽくなる	1(2.1)	6(12.5)	3(6.3)	12(10.2)	6(5.3)	1(0.9)	22(16.2)	17(12.5)	(　)	35(11.7)	29(9.7)	4(1.3)
	48		(64.0)	114		(81.4)	136		(93.2)	298		(82.5)

(　) %

Tabie 2
随伴症状（韓国）

対象者 / 項目	中学生〔57〕			高校生〔97〕			大学生〔119〕			全体〔273〕		
	月経前	月経中	月経後	月経前	月経中	月経後	月経前	月経中	月経後	月経前	月経中	月経後
1 頭　痛	3(6.0)	6(12.0)	2(4.0)	2(2.2)	7(7.7)	2(2.2)	6(5.4)	7(6.3)	(　)	11(4.4)	20(7.9)	4(1.6)
2 乳房の張り	2(4.0)	2(4.0)	2(4.0)	5(5.5)	(　)	(　)	13(14.4)	8(7.2)	1(0.9)	20(7.9)	10(4.0)	3(1.2)
3 胃　痛	3(6.0)	3(6.0)	2(4.0)	1(1.0)	(　)	(　)	3(2.7)	4(3.6)	(　)	7(2.8)	7 (2.8)	2(0.8)
4 胸のむかつき	2(4.0)	9(18.0)	2(4.0)	3(3.3)	3(3.3)	(　)	7(6.3)	11(9.9)	1(0.9)	12(4.8)	23(9.1)	3(1.2)
5 腰　痛	8(16.0)	14(28.0)	4(8.0)	26(28.6)	38(41.8)	4(4.4)	39(35.1)	46(41.4)	4(3.6)	73(29.0)	98(38.9)	12(4.8)
6 腰のだるさ	4(8.0)	6(12.0)	(　)	6(6.6)	17(18.7)	3(3.3)	11(9.9)	19(17.1)	2(1.8)	21(8.3)	42(16.7)	5(2.0)
7 下腹部痛	10(20.0)	22(44.0)	(　)	28(30.8)	41(45.1)	2(2.2)	46(41.4)	47(42.3)	4(3.6)	84(33.3)	110(43.7)	6(2.4)
8 下腹部の重さ	2(4.0)	4(8.0)	3(6.0)	2(2.2)	14(15.4)	1(1.0)	16(14.4)	29(26.1)	2(1.8)	20(7.9)	47(18.7)	6(2.4)
9 おりもの	22(44.0)	5(10.0)	13(26.0)	46(50.4)	9(9.9)	13(14.3)	40(36.0)	11(9.9)	10(9.0)	108(42.9)	25(9.9)	36(14.3)
10 排尿多い	4(8.0)	8(16.0)	3(6.0)	5(5.5)	6(6.6)	1(1.0)	6(5.4)	11(9.9)	2(1.8)	15(6.0)	25(9.9)	6(2.4)
11 便　秘	3(6.0)	2(4.0)	4(8.0)	5(5.5)	13(14.3)	3(3.3)	7(6.3)	13(14.4)	2(1.8)	15(6.0)	28(11.1)	9(3.6)
12 下　痢	1(2.0)	4(8.0)	1(2.0)	2(2.2)	5(5.5)	1(1.0)	6(5.4)	9(8.1)	1(0.9)	9(8.1)	18(7.1)	3(1.2)
13 貧　血	1(2.0)	3(6.0)	3(6.0)	4(4.4)	12(13.2)	5(5.5)	6(5.4)	16(14.4)	3(2.7)	11(4.4)	31(12.3)	11(4.4)
14 全身のだるさ	2(4.0)	13(26.0)	1(2.0)	5(5.5)	13(14.3)	(　)	14(12.6)	23(20.7)	5(4.5)	21(8.3)	49(19.4)	6(2.4)
15 眠　気	4(8.0)	16(32.0)	6(12.0)	3(3.3)	12(13.2)	1(1.0)	3(2.7)	12(10.8)	1(0.9)	10(4.0)	40(15.9)	8(3.2)
16 興　奮	1(2.0)	8(16.0)	2(4.0)	1(1.0)	5(5.5)	(　)	1(0.9)	3(2.7)	2(1.8)	3(1.2)	16(6.3)	4(1.6)
17 いらいらする	3(6.0)	12(24.0)	4(8.0)	2(2.2)	3(3.3)	(　)	6(5.4)	3(2.7)	(　)	11(4.4)	18(7.1)	4(1.6)
18 怒りっぽくなる	5(10.0)	22(44.0)	4(8.0)	9(9.9)	28(30.8)	2(2.2)	22(19.8)	26(23.4)	3(2.7)	36(14.3)	76(30.1)	9(3.6)
	50名		(87.7)	91名		(93.8)	111名		(93.3)	252名		(92.3)

（　）%

していることを示唆する。　初経発来の分布については、未初経者が多く今報告においては検討しない。　K•J群において初めて平均初経年齢が、11歳8ヶ月と11歳台に入ったことに注目しておくべきである。その要因として自然科学的条件（栄養・運動）よりも社会科学的条件（親の職業・学歴）および社会経済的条件（経済・文化水準）の向上にあると考えられる。

ま と め

平均初経年齢は、1987年の結果に比べ1993年はJ•C群12歳1ヶ月で8ヶ月、K•C群13歳1ヶ月で1ヶ月、J•H群12歳5ヶ月で10ヶ月、K•H群12歳9ヶ月で4ヶ月、J•J群12歳1ヶ月で5ヶ月、K•J群11歳8ヶ月で7ヶ月各群とも若年化傾向を示している。

平均初経年齢がK•H群は初めて12歳台、K•J群においても初めて11歳台を示した。

展　望

日本・韓国の調査研究を継続し、社会情勢の変化や生活文化の発展にともない初経年齢がどのように変化していくか、特に初経年齢の若年化が進んでいる韓国に注目しながらさらに初経年齢とスポーツによる筋肉刺激の関係について究明したい。

また、本報告において両国ともに随伴症状の上位を占めた症状は、「下腹部痛」•「腰痛」など身体的愁訴であるが、精神的愁訴である「いらいらする」•「怒りっぽくなる」•「眠気」等訴える者が、韓国の各群ともに上位グループに入っているのに対し、日本の各群においては6位以下であることも今後注目しておきたい事柄である。

参考文献

1）森岡恭彦：医学大事典258　1985
2）Tanner, J. M. Goldstein, H and Whitehouse, R. H.: Standards for children's height at ages 2 to 9 years, allowing for heights of parents of Dis. in Childh. 45 (224) : 755−762, 1970.
3）Tanner, J. M.: Foetus into Man. open Books 1978.
4）守山正樹、柏崎　浩、鈴木継美：日本における初潮年齢の推移。民族衛生、46; 22—32、1980

5）平野睦男：産婦治療、42;164、1981
6）松本清一：月経とその異常、医学の世界社、東京、1962